

## フランクフルにおける〈人生の意味〉(3)

荒 井 優

Masaru Arai : "The Meaning of Life" by Frankl (3)

### 8. 苦悩の真相

仏教が「四苦八苦」の説教からはじまるように、私たちは多かれ少なかれ苦しみを経験しながら生きている。時間とともに解消される苦しみもあれば、一生引きずらなければならぬ苦しみもある。失恋、病気、死別、生き別れ、意に添わない生活環境、漠然とした人生の無意味感、そして<sup>せきばく</sup>寂寞感……。たとえ今は幸福のなかにあっても、その幸福はやがては失われる。出会いは別れをとまなう。そして最期には死をもって、すべてのものと別れなければならぬ。まさしく人生は「無常」(常なるもの無し)である。この無常ゆえに、私たちは不安に捉えられ、人生は苦に満ちたものとなる。これが仏教による「人生苦」の分析である。

フランクフルが「人生の意味」を問いつづけるのも、仏教と同様に、人間は具体的な「人生苦」にどのように対処し、どのように乗り越えてゆくことができるのか、その問いの一点に人間存在の真相がひそんでいると考えるからである。こうした問いはすべての宗教に、そしてすべての思想的イデオロギーにも内包されている問いである。そして往々にして、次のような調子で答えが提示される。いわく、神のために、神の愛に応えるために、汝は生きるべし、と。あるいは、理想社会の実現のために、人類の進

歩のために、汝はその布石となるべし、と。人類の歴史を「大きな物語」のように描き、そこから結局「人間は～のために生きるべし」といった答えが導き出される。だが、フランクフルはこうした、個人を越えた、人類普遍の抽象的価値に答えを求めるようなやり方をとらない<sup>1)</sup>。その理由について彼は語っていないけれども、ドストエフスキーの次の言葉が明確な答えになっている。「いつかずっと先になつたら、苦痛も癒され償われ、人生の矛盾のいまいましい喜劇も哀れな蜃気楼として……消えてしまい、世界の終極においては、一種たえようのない高貴な現象が出現して、それがすべての人々の胸に満ち渡り、すべての人の血潮をあがない……。すべてこのとおりになるとしよう。しかし、ぼくはこれを許容することができないのだ。いや、許容したくないのだ！」<sup>2)</sup>1000年後とは言わずとも、200年後あるいは300年後には矛盾も苦しみもない理想的な社会が実現したとしても、今ここに生きる私の人生にとってそれは何の意味づけにもならない。結局、あらゆる人間が共通して実現すべき「目的」や「意味」など存在しないのである。なるほど人生に苦しむ人は往々にして全人類の「普遍妥当的」な価値を求めがちになる。しかし人生の苦しみは、あれこれの具体的な出来事から生じる。そうであれば、その解決は具体的でなければならない。なぜなら苦の解決とは、苦しい状況無くすることではなく、苦しい状

況をどう受けとるかにかかっているからである。ここに、フランクル独自の「苦悩」の分析がある。

苦しみとは何か？ この問いは次のように問い直してもよい。この不幸な出来事（喪失）がなぜ私にとって苦しいのか？ そう考えたとき、苦悩の真相がはっきりする。苦しみとは「意味の欠如」（der Mangel am Sinn）である。私に降りかかったその不幸な出来事を苦痛と覚えるのは、その出来事に「意味」を見いだせないからである。たとえば、本社に勤めるあるサラリーマンが僻地の支社へ左遷されたでしょう。彼はその左遷を喜んで受けとることはできないであろう。しかし、その左遷が彼の長い人生のなかでどのような意味をもちうるかという個人的な説明がなされたとき、彼はこの状況を喜んで受け入れることができる。「いわれなき苦しみ」に合理的な意味が与えられたとき、私たちはその苦しみを受け入れ、意味づけることができる。

## 9. 態度価値

受け入れがたい出来事をいかにして受容するか、そこにフランクルは人生の究極の意味と価値を見いだす。その価値を、彼は「態度価値」と名づけている。

私たちは不断にさまざまな仕方で人生の満足と充足をはかっている。ある時は仕事の達成感をもって、またある時は好ましい人との交友をもって、またある時はひとり読書に耽り、あるいは音楽に陶醉することによって……。フランクルは、人生の意味づけに三通りのやり方がある、という。それらを「創造価値」（schöpferischen Werte）、「体験価値」（Erlebniswerte）、「態度価値」（Einstellungswerte）という。

私たちは人生という「舞台」のうえで生きている。いや、否応なくそこへ投げ込まれている。そして「具体的な《その時々》の要求」が私たちを待ち受けている。<sup>3)</sup>フランクルによれば、日々のあらゆる瞬間、あらゆる状況が私の人生に意味を与えてくれる

機縁なのである。「その時々」の要求に対して、私たちはさまざまに答える必要がある。<sup>4)</sup>答えること、すなわちその時々状況を受け入れ、それに対して何を行いどのように反応するか、そこに「人生の意味」があるとフランクルは考える。

### 1) 創造価値

「まず第一に考えられるのは、活動によって答える答え方である。それは何かを行うことで応答するというやり方である。何かを活動すること、また何か作品を創造することによって、人生が課す具体的な問いに答える答え方である。」<sup>5)</sup>世界の中で何かを創り出すという能動的な活動によって人生を意味づけようとするやり方を、フランクルは「創造価値」という。それは作品の創造だけにとどまらない。仕事による達成感、あらゆる種類の企画や計画の立案とその実現、勉学や研究、ボランティアなどの社会活動・地域活動、家庭での好ましい夫婦関係・親子関係への努力とその環境（家・庭、室内等）づくりなど——「子づくり」も創造価値に含まれるかもしれない——、私たちが社会や家庭のなかで行う努力のほとんどは、この創造価値に属している。

フランクルはこの創造価値を他の二つの価値と比べて軽く扱っているが、この価値もまた人生の多くの部分を占めていることは事実である。しかし、人生を意味づけるものとしてこの価値しか知らないとしたら、その人は「成功と失敗」の尺度でしか生きられない「働く人間」（Homo faber）なのだ<sup>6)</sup>、とフランクルはいう。彼は余暇や遊びを無駄と見なすであろう。そして失敗者や落伍者<sup>さげす</sup>を蔑むであろう。苦悩や不幸に見舞われてまっ先に自己崩壊に陥るのは、まさしくこのタイプの価値観である。なぜなら、彼は苦悩に対する意味づけができないからである。現代の、とくに日本に見られる「仕事人間」は、まさにこのタイプに属すと言えよう。

しかし、ユダヤ教徒であるフランクルには、きわめて宗教的な職業観があったことを見落としてはならない。「人生から与えられた仕事は、その人だけ

が果たすべきものであり、その人だけに求められているのです。』<sup>7)</sup>フランクフルトのこのような職業観は、現代の日本人にはなかなか理解しがたい。通常、仕事は生活収入をかせぐためにするものだ、と私たちは考える。仕事は必要悪なのである。仕事が生計を維持するためだとすれば、人生の意味はそこからは出てこない。仕事は消耗であって、生きがいとはならない。まして、「使命」として受け取られることはない。しかし西洋ではプロテスタンティズムの出現以来、「職業」(Beruf)は神から与えられた召命であった。人はそれぞれ自分に与えられた天賦の才と能力を見つけようと努める。それを磨くことによって、世の中に参与し、神の召命に応えようとする。それが人間の存在意義だと考えられているからである。仕事は与えられた召命に対する応答なのである。フランクフルトは「仕事」を、プロテスタンティズム誕生より1500年も前に実在したユダヤ教タルムードの創始者ヒレル(Hillel, BC. 70-AD. 10)が記した、次のような格言でもって理解する。「もし私がそれをしなければ、誰がそれをするのか。しかし、もし私が自分のためにだけそれをするなら、私は何であろうか。」<sup>8)</sup>仕事は私の意にそって選び行うのではない。仕事は私を選び、私に実現されるのを待っている。あたかも、彫刻家が木を彫るとき、その木は彼に彫られるのを待っているように。その時その時、必要に応じて仕事や活動を果たす。それによって、私は人生に答えてゆけばよい。創造価値における「創造」は、仕事を通して私自身の人生の創造となるのだから。そしてそのとき、私は世界につながり、神につながる。

## 2) 体験価値

創造価値による人生の意味づけができなくなったとき、この価値のみによって生きてきた人たち(「働く人間」)は人生に絶望する。フランクフルトはナチスの強制収容所のなかに、そして戦後は彼が勤める精神科病棟のなかに、そのような絶望のおびただしい実例を見た。彼が「人生の意味」について講演し、

書物を出版するのも、そのような人たちに対してであった。「ところで、人間は生きてゆくなかで、その時その時の《時機に突きつけられる要求》に応じて、いつでも意味実現の方向を変える用意がなければならぬのです。」<sup>9)</sup>たとえ創造価値の機会が不可能になったとしても、それでも人生を意味深く豊かにすることはできる。第二の価値は世界をそのまま受動的に受け取るだけの価値、すなわち「何かを体験すること、自然、芸術、人間を愛することによって」<sup>10)</sup>実現される価値であり、フランクフルトはこれを「体験価値」と名づけている。

もしも自分の命があと数日、あるいは数ヶ月と知らされたでしょう。この病床から起きあがることもできず、筆をとる体力すらないでしょう。そのとき、私たちは創造価値の機会を失うであろう。フランクフルトは、かつて手術不能な脊髄腫瘍で入院していたある青年のことを思い浮かべて語っている。彼は若くて活動的な広告デザイナーだった。彼はその創造的な仕事によって「創造価値」を実現していた。しかし悪性の腫瘍が見つかり、「彼は突然それまでの職業生活を中断せざるをえなくなった。この腫瘍のために、すぐに手足が麻痺状態になった。もはや彼は、それまで自分の人生を意味づけていた、活動的な生活に向かう方向を維持することができなくなった。……そのような制約された活動範囲のなかで、なおも彼は生きる意味を手に入れようとした。その患者はどうしたであろうか。病室で横になりながら、彼は猛烈に読書に取り組んだのである。それまで、職業生活を送っていたときには読むゆとりすらなかった書物を読み耽った。せつせとラジオで音楽を聴き、ほかの患者の一人一人と活発に会話を交わしたのである。」<sup>11)</sup>こうして彼は、受け身の生活のなかで「体験価値」を実現していったのである。

美しいもの、崇高なもの、真実なものに感動し涙することによって、人生の意味を体感するという瞬間がある。たとえばコンサートホールの典雅な響きに身をゆだね、あるいはなにげない街路樹の透きとおった新緑がふと目にとまり、その美しさにはっと

する瞬間を経験したことはないだろうか。その美しさに出会ったことが、予期せぬボーナスのように思える。芸術や自然に心捉えられる感動、なにげない妻の微笑み、人との出会い、友情や恋愛、そして無駄とも思える喫茶店での談笑、いや、あらゆる喜びとあらゆる悲しみのうちに、「体験価値」の可能性がある。フランクは、このような「体験価値」の重要性を知っている人を、「愛する人間」<sup>12)</sup> (Homo amans) と呼んでいる。

### 3) 態度価値

私たち人間には自分の力ではどうすることもできない状況がある。たとえば、死が間近に迫る最後の数日あるいは数時間、私たちにはいったい何ができるのか？ 創造価値の方向においても、体験価値の方向においても、もはや人生を価値あるものにする可能性がなくなったとき、それでも生きる意味があるのだろうか？ フランクの第三の価値はこのように時にこそ典型的に実現される。先に引用した広告デザイナーが自分の命は今夜かぎりと思ったときのことである。最後の痛みを和らげるために、死の数時間前にモルヒネを注射する手筈になっていた。その晩、当直医だったフランクがその患者のベッドのそばを通りかかったとき、患者は彼に「今のうちに注射をすましておいてください」と懇願した。「後であなたが看護婦に呼ばれて安眠を妨げられずにすむでしょうから」<sup>13)</sup>と。死に臨んで行く最後の決断——それがなんであれ、別れの挨拶であれ、遺言であれ——、そこには死に逝く人の秘かな、しかし決然とした内的行為がある。このような決断は、これから臨む死を受容し、生きてきたすべての人生を肯定して初めてなされる。この決断をフランクは「態度価値」という。

「自分の可能性が制約されているという事実がどうしようもない運命であり、避けられず逃れられない運命であっても、この運命に対してどのような態度をとるか、この運命にどう適応し、どう対処するか、この運命を自分に課せられた《十字架》として

どう引き受けるか、そこに生きる意味を見出すことができるのである。」<sup>14)</sup>

変えることのできない運命は死だけではない。起こってしまった不幸や災難もまた、すべての過去はもはや変えることができない。その出来事をどう受けとめ、これからどう生きてゆくかは、今ここにある私の決断と態度にかかっている。ある時、突然に身体的な障害をこうむったとしよう。その障害をもって生きなければならない人は、例外なく態度価値の実行を求められる。その感動的な実例を、ここに紹介しよう。

明治三十八年、大阪の堀江で一家の主が<sup>あるじ</sup>狂乱の末に一家五人を斬殺するという凄惨な事件が起こった。生き残ったのはただ一人、両腕を切り落とされた十七歳の少女だった。奇跡的に回復したものの、彼女を待ち受けていたのは過酷な人生だった。「私の人生は十七歳で打ち切られました」と彼女は自伝の中で回顧している。他人の世話によらなければ一日とて生きてゆけぬ、さりとて死ぬこともできない厄介者となった。「手無しの不具者」と蔑まれながら、少女は双腕のない体を芸にして生計を立てることを余儀なくされた。「好奇の眼的になるのが何ともいえぬ辛い悲しみ」<sup>15)</sup>だった。絶望の淵にあって、しかし彼女は、カナリヤが口一つで子を育てているのを見て、発心した。「体の不具者が心の不具者になり果ててはならぬ」<sup>16)</sup>と、口による筆書きを覚え、独学で書画の勉強に励んだという。45歳のとき得度出家し、尼僧大石順教となって京都山科に移り、同じ障害者の心の障害を癒すべく生涯を捧げた。「無手」を仏からの賜わり物として受け取り、そこに彼女自身の「生き役」を見出したという。享年八十歳、双腕を失くして多くのことを得ることができたと、尼僧は自らの運命を「無手の法悦」という言葉で結んでいる。「どんな逆縁も素直に受け容れ、そのことがらを通して、どう歩ませていただくかということに人生の大切な生き方があるのではないかと思うのでございます」<sup>17)</sup>

うち消そうにもうち消せない逆縁を、自分に与え

られた人生の役割（「生き役」）と覚悟し、ここにしか自分の生きる道はないと引き受ける。フランクフルトの言葉を借りれば、どうにもならぬ運命を「事実の次元」から「実存的な次元」へと引き移すのである<sup>18)</sup>。

苦しみの中にあって、私たちはたびたび心の中で神を告発し、神を問う。しかし問われているのは私たちの方だと考えたとき、偶然と思われる出来事の背後には、すべてが意味をもって存在することに気づく。禍を、逃れるべき悪と感ずるのではなく、自分に与えられた「生き役」と解釈してこれを受け取ることができたとき、その禍は人生の賜わり物となる。そのとき、人生には禍も福もない。もちろん、それは信仰に属することがらである。実証することはできない。しかしこの信仰によって、それまでばらばらだった人生の断片が一つの意味をもった文脈へと繋ぎ合わされるであろう。そして、それまでの取るに足りない惨めな自分が「掛けがえのない存在」となるはずである。もちろんこれによって、人生の悲しい現実が変わることはない。しかし一度失われた人生の意味は、この「態度価値」によって、ふたたび回復されるであろう。

病気になること、不具になること、失敗すること、そうしたすべての出来事は人生が与える「贈り物」なのだ、とフランクフルトはいう。そして、彼は次のように結んでいる。「私たちが態度価値を可能な価値のカテゴリーの領域の中へ引き入れると、人間の実存は何かあっても決して無意味にはなりえないことが分かる。人間の人生は、その意味を最後の極限にまで保持しているのである。したがって人間が生きて呼吸をしているかぎり、また彼が意識を持っているかぎり、人間は価値の実現に関して、少なくとも態度価値に対して、責任を担っているのである。」<sup>19)</sup>

態度価値は、たんに死や病気や災難といった特殊な、そして極限の状況においてだけ求められるのではないことが分かるであろう。それは私たちにとって、日常生活におけるあらゆる瞬間に、そして子細なすべての状況下で、求められている根源的な価値

である。なぜなら、この価値とともに人生は、それがどのような人生であれ、全面的に引き受けられ受容されるからである。そしてこの人生肯定によって初めて、私たちの人生は、ある時には創造価値によって満たされ、またある時には与えられた体験に身をゆだねることによって豊かにされるのである。このように「態度価値」を人生の基底にすえて生きてゆく人を、フランクフルトは「苦悩する人間」(Homo patiens) と呼ぶのである。

## 10. 超意味

フランクフルトによれば、「生きる」とは「問われている」ことである。そして、「生きることにどれほどの意味があるのか」という問いは間違いであることが分かる。人生の意味は、言葉によってではなく、活動と体験と決断によって私たち自身が答えなければならない。私たちは「問う」側ではなく「問われている」側である。今この状況の中で、この状況を通して問われている。災難にあえば、災難を通して問われている。フランクフルトのこのような人生観・人間観の背後には、どのような宗教哲学があるのであろうか。私たちはフランクフルトの宗教哲学を通して、すべての宗教・宗派を越えて、すべての信仰に共通する「信仰」の原型をかいま見ることができるようになると思う。

そもそも「世界の出来事全体に意味があるのか」という問題から、私たちは始めることにしよう。はたして私たちの人生の背後には、すべてを統括するような「究極的な意味」があるのだろうか？ 人間の身に起こり、しかも起こるいわれもなく起こる避けがたい出来事を、私たちは「運命」という。それは人間の意や思いを超えており、操縦不能である。その運命の背後には、何らかの秩序（仏教のいう「仏法」）が、つまり意志（ユダヤ・キリスト教の「摂理」）があるのだろうか？ そのような秩序ないし意志があるのなら、すべては有意味となる。たとえ私の人生が無意味だったとしても、その無意

味な私の人生ですら、私の、あるいは神の手のひらの上では、大いなる意味をもつことになろう。ヒットラーは憎むべき大罪人とされるが、神の手のひらの上では愛すべき「神の子」である。それとも、そのような神的な超越者は存在せず、すべては無意味であり、運命はまったく「不幸な偶然」にすぎないのか？

フランクはこの二つの存在論のあいだに立って、「どちらの可能性も反駁できないし、証明もできない」<sup>20)</sup>と冷静にかつ理性的に語っている。いずれも、人間の理性と経験を超越しているからである。現代は科学的合理主義の時代である。そして現代の科学主義は人生の「究極的な意味」の存在を認めていない。すべては「偶然」である。世界の始まりが説明されないかぎり、世界は偶然に始まり偶然に終わる。そう考えられている。私たちの人生もまた、偶然に、つまり理由もなく意味もなく始まったのである。しかしその合理主義に徹するならば、「すべては偶然である」という決定が論理的な決定ではないことは明らかである。証明不能だからであり、世界の全体像が認識されていないからである。現代の科学主義もまた、独断論に陥っていることになる。

「まったくの無意味か、すべてが有意意味か」の決定は、論理的には、いずれも根拠のない決定である。だからこそ、それは決断であり「賭け」なのだと、かつて言ったのはフランスのキリスト教哲学者パスカル（Blaise Pascal, 1623-1662）だった。根拠がないからこそ、それは賭けであり、決断を正当化させる根拠となる。このときに行う「賭け」つまり決断が「信仰」である。フランクが「態度価値」といい「コペルニクスの転回」というとき、彼はすでに「信仰」の観点から言っていたのである。いや、それどころか彼は15、6歳のときから一貫して彼自身の「信仰」を持っていた<sup>21)</sup>。

この信仰の決断を下すとき、私たちは「超意味」の地平で生きることになる。私たちは日常生活のなかでさまざまな「意味」を感じながら生きている。それを「音波」に譬えるなら、「超意味」はさしず

め「超音波」に対比されるであろう。音波は私たちの耳で捉えることができるが、超音波は私たちの聴覚を超えている。それと同じように「超意味」は人間の理性と経験を超越している。科学では捉えられないからこそ、その地平は決断の問題となり、信仰の問題となる。

この信仰の世界の核となるテーゼは、「偶然は存在しない」という強い信念であろう。「偶然と思われるその背後には、高尚な深い意味が存在しており、究極的な意味が秘められているのです」<sup>22)</sup>とフランクは語っている。私たちに起こるすべての出来事は「意味」をもって起こる。風に揺れる樹々のざわめき、何げなく手にした本、人との出会い、人との語らい、何げない言葉……、私たちが経験する出来事は、すべて偶然に起こるのではない。そう、もしもこの世界の背後に究極的な何かが働いているのなら、偶然は存在しない。偶然と思われる文脈のない出来事は、一つの方向をさし示しながら連なり合って起こる。あたかもロウソクの炎によって浮かび上がるあぶり絵のように、長い年月の経過とともに、やがて一つまた一つと結び目が浮かび上がってくる。しかし、どこまでも謎は残るかもしれない。

「私たちはただ、すべては意味に満ち、超意味を持つと信じるだけである。しかし、それがどのような意味を持つのか、どのような意味においてすべては超意味に満ちるのか、……これらのことはすべて私たちには知ることができない。」<sup>23)</sup> 私たちが人間として生きているかぎり、「超意味」の地平を知ることにはできない。神の意志（摂理）を知ることができないように。しかし超意味は、私の行動や企図とは関係なく、私の人生に浸みわたっている<sup>24)</sup>、とフランクは言う。だから私たちはもはや意味を問う必要がない。人生の意味はすでに私たちに与えられている——神の手のひらの上にあるかぎり。私たちはそのことに気づき、意味を受けとり、自分の「生き役」を果たして行けばよい。

フランクの「超意味」の宗教思想には、「裁き」と同時に「救い」（「癒し」と言ってもよい）がある。

なぜなら、私にもたらされた苦悩が神の意志によるとするなら、それは私にとって「裁き」以外の何ものでもないであろうから。しかし、後になって、その出来事の本当の神意を知るならば、それはとりもなおさず私にとって「救い」となるであろう。フランクルの「超世界」の宗教思想は、人間のはからいを超絶した、最も典型的な「他力」の世界を彷彿とさせる。

しかしフランクルの「超意味」の思想はこれだけではない。彼は、他力の信仰が陥りやすい誤謬について、指摘し警告している。自分が恩寵の道具であるかどうか、摂理に仕えているかどうかを問うべきではない<sup>25)</sup>、と。信仰はつねに狂信の危険をはらんでいる。神に代わって、すべてを人間的我流でもって説明し尽くそうとする。そして他者を断罪する。摂理を信ずるあまり、私たちは摂理を見透かし当てにする。しかし摂理によって私の人生がどうなるのかを、私たちはあらかじめ知ることはできない。摂理は私たちの把握能力を超えている。摂理と同じように、私たちは「超意味」を信頼することはできても、それを期待することはできない。だから、行為に際して「超意味」に固執すべきではない。「超意味」の信仰を薄くしなければならない<sup>26)</sup>とフランクルは警告する。超意味は後になって感じられるのであって、人間の抱く意図において与えられているのではない。ただ、存在するすべてのものは「超意味」の懷に抱かれていて、信ずればよい。私たちは自己を放棄し、意味への問いを放棄して、ただ「問われた者」として自分の置かれた状況、自分に課された役割と課題にひたすら専心すればよい。「ひとが自分の仕事に専心すればするほど、摂理はそのひとにおいて働き、そのひとを通して成就される。」<sup>27)</sup>自分の行いを神の鏡に映して見るようなことをしなければ、そして摂理に少しも気づかないでいるとき、そのときこそ私たちは摂理に仕えるのであり、そのときこそ摂理は私たちを用いているのである。

#### 引用文献

1. Frankl, *Ärztliche Seelsorge*, 1946, 1982<sup>2</sup>——邦訳『死と愛』霜山徳爾訳、フランクル著作集2、みすず書房、1957年。
  2. Frankl, *...Trotzdem Ja zum Leben sagen*, 1946；改版*Die Sinnfrage in der Psychotherapie*, 1981〔以下、改版*Sinnfrage*と略す〕——邦訳『それでも人生にイエスと言う』山田邦男・松田美佳訳、春秋社、1993年。
  3. Frankl, *Homo patiens: Versuch einer Pathodizee*, 1951；改版*Der leidende Mensch*, 1984〔以下、*Der leidende Mensch*と略す〕——邦訳『苦悩の存在論』真行寺功訳、新泉社、1972年。
  4. Frankl, *Theorie und Therapie der Neurosen*, 1956——邦訳『神経症』Ⅰ・Ⅱ霜山徳爾訳、フランクル著作集4・5、みすず書房、1961年。
  5. Frankl, *Das Menschenbild der Seelenheilkunde*, 1959——邦訳『精神医学の人間像』宮本忠雄・小田晋訳、フランクル著作集6、みすず書房、1961年。
  6. Frankl, *The Was nicht in meinen Büchern steht, Lebenserinnerung*, 1995〔以下、*Lebenserinnerung*と略す〕——邦訳『フランクル回想録』山田邦男訳、春秋社、1998年。
  7. Frankl, *The Will to Meaning: Foundations and Applications of Logotherapy*, 1969, 1988<sup>2</sup>
- 1) *The Will to Meaning*, S. 54f.
  - 2) ドストエフスキー『カラマゾフの兄弟』米川正夫訳、第5編第3章、世界文学全集18、河出書房、1968年。
  - 3) 『それでも人生にイエスと言う』、31頁／改版*Sinnfrage*, S. 90.
  - 4) 同上箇所。
  - 5) 同上箇所。
  - 6) 『精神医学の人間像』、59頁。
  - 7) 『それでも人生にイエスと言う』、32頁／改版

- Sinnfrage*, S. 91。
- 8) 『それでも人生にイエスと言う』、56頁／改版  
*Sinnfrage*, S. 100。
- 9) 『それでも人生にイエスと言う』、73頁／改版  
*Sinnfrage*, S. 106。
- 10) 『それでも人生にイエスと言う』、72頁／改版  
*Sinnfrage*, S. 106。
- 11) 『それでも人生にイエスと言う』、74頁／改版  
*Sinnfrage*, S. 106f。
- 12) 『神経症』Ⅱ、40頁。
- 13) 『それでも人生にイエスと言う』、76頁／改版  
*Sinnfrage*, S. 108。
- 14) 『それでも人生にイエスと言う』、72-73頁／改版  
*Sinnfrage*, S. 106。
- 15) 大石順教『無手の法悦』、105頁（春秋社、新版  
1994年）。
- 16) 『無手の法悦』、184頁。
- 17) 『無手の法悦』、147頁。
- 18) 『苦悩の存在論』、117頁／*Der leidende Mensch*,  
S. 206。
- 19) 『死と愛』、54頁／*Ärztliche Seelsorge*, S. 61。
- 20) 『それでも人生にイエスと言う』、112頁／改版  
*Sinnfrage*, S.。
- 21) 『回想録』、68頁／*Lebenserinnerung*, S. 36。
- 22) 『回想録』、70頁／*Lebenserinnerung*, S. 38。
- 23) 『苦悩の存在論』、205頁／*Der leidende Mensch*,  
S. 240。
- 24) 『苦悩の存在論』、105頁／*Der leidende Mensch*,  
S. 202。
- 25) 『苦悩の存在論』、202頁／*Der leidende Mensch*,  
S. 239。
- 26) 『苦悩の存在論』、105頁／*Der leidende Mensch*,  
S. 202。
- 27) 『苦悩の存在論』、202頁／*Der leidende Mensch*,  
S. 239。